

農家の倅の会 -農業土木研究は農業にどう還元されるのか-

Society of Farmer's Son -What We Can Do for Agriculture as AE Researchers? -

酒井一人¹⁾ 溝口勝²⁾ 大澤和敏³⁾ 安瀬地一作²⁾ 徳本家康⁴⁾ 登尾浩助⁵⁾

Kazuhiro SAKAI, Masaru MIZOGUCHI, Kazutoshi OSAWA, Issaku AZECHI, Ieyasu TOKUMOTO,
Kosuke NOBORIO

1. はじめに(サラリーマンの息子：酒井一人)

農業土木研究は多くの場合、各種事業を通して農業と密接な関係を持っているといえる。しかし、実家が農業を営む研究者や学生の中には、家族の期待を背負い農学部に進んだにもかかわらず、自分達の研究が明日の農業に繋がるのかという疑問をもつ者が多いのも事実である。そこで、本セッションでは農家の倅や農村振興事業関係者により、明日の農業に繋がる農業土木研究のために考えるべき点は何であるかについて議論する。

2. “農家の倅の会 ML” 設立の経緯(栃木県水田農家の二男：溝口勝)

農業土木学は本当に農業の現場に役に立っているのか？日本の農業に未来はあるのか？農家の息子であるという漠然とした使命感みたいなものを持ちながら、何となく農学部へ来てドクターに進学し、大学助教授にまでなってしまった。しかし、未だに答えが見つからない。ただ何となく、“違うんだよなー”と生理的に感じている。この歳になって周りを観察すると意外にそんな感覚を持つ学生さんがいることに気づいた。農学系の大学院教員ならばしっかりとしたビジョンを示せねばならない筈。しかし、残念ながら自分自身が悩んでいる。それならば悩んでいる者同士で意見交換から始めよう。ということで、メーリングリスト(ML: farmers@soil.en.a.u-tokyo.ac.jp)を作成した。MLを利用して、日頃感じている農業現場と大学研究室のギャップについて、議論していきたいと考えている。

3. “農家の倅の会” 賛同者の声

(1) 群馬県畑作農家の長男：大澤和敏

私は群馬県の大和芋(とろろ芋)農家の長男として親の期待を暗に受けつつここまで大学に残ってしまった。直接、農作業を幾度となく体験し、肉体的、経済的辛さの少しはわかっている。その「農家の悩み」または「農家の声」を少しでも反映し、これからの日本の農業(自分の家の農業)のあり方について議論していきたいと思う。農家の倅でありながら、自分の家の農業について把握していない部分が多くあり、現在の自分の家の状況をもっと詳しく知らなければならぬと思っ

ている。また、将来、研究者兼農家を希望しているが、その具体的方法などについて模索していきたいと考えている。

現在の研究テーマは「沖縄の赤土流出」であるが、その研究を通して沖縄県の農家の数人と知り合い、話をした結果、農家は農業土木研究者への期待はしていない人が多いようである。むしろ、

¹琉球大学農学部 Faculty of Agriculture, The University of Ryukyus

²東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduates School of Agricultural and Life Sciences, The Univ. of Tokyo

³東京工業大学大学院理工学研究科 Graduate school of Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology

⁴岩手大学連合大学院連合農学研究科 The United Graduate School of Agricultural Sciences, Iwate University

⁵岩手大学農学部 Faculty of Agriculture, Iwate University

役人サイドの人間として敵対視される場合もある。確かに汚染の原因が農業であるので、その調査をしても農家には煙たがられるのはわかるが・・・

個人的には、農業への貢献を希望しているのにそれができないもどかしさをいつも感じている。農業が環境への負荷を増大させる原因となっていることが多い現代なのだが、それを農家に言ってもどうしようもない話なのだと思う。それならば、一体どんな姿勢で研究に臨む姿勢をとったらよいのであろうか？また、研究で得られた知見の農家へのフィードバックはいかにして行うべきなのであろうか？

このような機会を通して研究のテーマと農家への貢献の関係を吟味しながら、農家と農学研究者のあり方を議論していきたいと考える。

(2) 熊本県みかん農家の長男：徳本家康

私は熊本出身のみかん農家の長男である。みかんの他には米やもち米を主に作っている。小さい頃は、畑や田んぼが遊び場だったので、土には特に親しみを持っている。現在、博士課程に進学しており、常に農業を考えた研究を博士課程では行いたいと思う。そして、研究で得られた知見を農業へフィードバックすることが重要であると考えます。

日本の今後の農業を考えると色々問題が多く、暗澹たる気持ちになるが、食べ物なくして人は生きられないため、これからは農業の時代だと思われる。ただし、日本の農業事情においては、早めに手を講じないと、日本の農業がなくなってしまうのではないかという懸念がある。それは誰もが本や教科書などで習う知識なのだが、農家の倅はその危機感を肌で感じていると私は思う。みかん農家に関していえば、実家の近くではあまりの価格の低さにみかん農家をやめる人も多く、畑が荒れていくのを目の当たりにすると本当に将来が不安になる。

現在の自分は、農業土木が実際に研究を通してどれほど農業に貢献しているのか正直よくわかっていない。そこで、様々な関係者が農業の事をどのように考えて研究されているのか議論ができれば誠に光栄である。このような機会に農業に関して議論したり、農業情報が得られることを大変うれしく思う。

(3) 愛媛県4反農家の長男：登尾浩助

農家の倅で、かつ農学に関わる教育者・研究者あるいは技術者は、「農学栄えて、農業滅ぶ」の諺を単なる言葉の遊びとして葬り去り、「農学栄えて、農業栄える」を実践することのできる(あるいは少なくとも実践しなければならないと痛切に感じている)人材だと思う。火星に探査機を無事に送り込むのに匹敵するほどの極めて高度の科学技術力をもってはじめて、農業が栄えるのだと思う。日本人の食料供給源としての農業は軽んじられては決していけないのに、これまでずっと軽んじられてきている。昨今の BSE や鶏インフルエンザの流行によって、輸入食料品への過度の依存がどのような結果を招くかを国民の皆さんには少しは身近に感じてもらったのではないかと思う。21 世紀初頭に我々は、農学と農業の関係をこれまで以上に緊密にする非常な好機に遭遇しているのではないかと思う。そしてこのことを一番よく感じ取っているのは、農家の倅であり農学関連の研究をしている我々ではないだろうか。我々の責務は大変大きいと自覚して前進する必要がある。

4. おわりに

勉強不足であることはわかっている。本物の百姓にかなうはずないこともわかっている。しかし、いま何かが必要なのだと思う。当日のセッションでは、まずはざっくばらんな議論をしたい。